

# ミステリ読書案内

2023. 7. 20 発行元

第499号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 加納朋子「空をこえて七星のかなた」

昨年5月に集英社から出た本。目立つ作品ではないが、「星」をテーマにしていることが特徴。「天文学」を専門にしてきた私には惹きつけられる内容だった。「星」のことを中心に本書のことを取り上げてみたい。

### 「南十字星」の話

7話が集まった連作短編集の形式。第一話は『南の十字に会いに行く』は、中学生の七星がパパと一緒に沖縄・石垣島に行く内容。

南十字星は私のいる東北地方からはまったく見えないが、石垣島まで行けば水平線の上に上半分が顔を出すことになる。もちろん南半球のオーストラリアにいけば、年間を通じて見えている期間は長い。

南十字星はオーストラリアとニュージーランドの国旗に描かれている。ただ、ちょっと違う点がある。どこが違うのかは旗の実物を比べてみるとよくわかる。

### 白鳥座の「アルビレオ」

第二話になると夏休み、山奥のホテルで「こども天文教室」に参加する話が出てくる。小型の望遠鏡でアルビレオを覗かせてくれるシーン。アルビレオは代表的な二重星で、青と金の二色の対比が素晴らしい。

集まった子どもたちに狙った星を見せるのはなかなか難しい。星は地球の自転により、常に移動しているので、望遠鏡を正しく設置して、なおかつ自動追尾をかけなければならない。子どもの背丈によって覗く位置や姿勢がまったく異なるので、調整もたいへん。文章で書かれていると簡単そうに見えるが、現実には工夫が必要である。

### ほしは“すばる”

第二話の題名は『星は、すばる』。元々は『枕草子』の記述である。「星の中で一番趣があるのは昴である」という意味。牡牛座にある星の集団で、肉眼でも6個くらいの星がごちゃっと集まっているように見える。ぼおっと雲がかかったようにも見える。プレアデス星団とも言う。

第四話の『木星荘のヴィーナス』は惑星絡み。木星表面の縞模様や大赤斑を望遠鏡で見るにはそれなりの慣れが必要。それよりはガリレオ衛星の動きの方が簡単に観測でき

### 「望遠鏡」の話

星に興味を持つと、望遠鏡で観察したくなる。月のクレーターも土星の環も実物を自分の目で見るのが大切。口径が6cmか8cmくらいの屈折望遠鏡でよい。ただし、一流メーカーのもの。値段の安いものは見えない味が格段に劣る。

口径10cm以上は使いこなせばかなりの能力だが、毎日一人で出し入れするのは大変。ドームの中に常時設置してある自家天文台なら最高。

今はもう買う気もないが、もし買うなら高価なシュミットカセグラン方式の反射望遠鏡がいいなと思っている。今私の手元にあるのは50年前のニコンの双眼鏡のみ。

金星の満ち欠けは教科書にも登場する基本的知識。

### 「月への旅」実現に向けて

途中、SF風の物語が登場したりするが、最終話『リフトオフ』で全ての話が関連付けられて、結末に向かう。月を周回するステーションができるのだろうか、月面での開発作業が開始されるのだろうか…。それはどれぐらい先のことになるか…。

### 「星空」のことを話そう

中学校の理科で「天文」の単元は3年生になる。でも、実際に夜空を見ながら学習させることは難しい。夏休みの課題に「星空を見てみよう」などの自主研究課題を出すのだが、実行する生徒はそれほど多くない。学習指導要領も教科書の記述も勢い紙の上での理論上の説明になってしまう。次元の違う空間と時間の世界を子どもたちに具体的に学ばせるのはなかなか難しい。

星空に向かい合った時感じるはそのスケールの大きさである。教科書、雑誌、星図…紙に書かれた星空はあまりにも小さい。プラネタリウムにしても、本物に比べればずっと小さい。初心者の人に「星座を覚えるのが基本だよ」と説明するのだが、紙の上に描かれた星座と夜空の星座は全く感覚が違う。その辺が多くの人に馴染んでもらえない理由なのかなとも思っている。(他にも理由はいっぱいあると思うけど…)

私は冬のキリッと引き締まった星空が好きだ。オリオン座を中心にした冬の大三角。ベテルギウス、リゲル、アルデバラン、シリウス、プロキオン、オリオン大星雲、そして「すばる」。星を観察するにはよい条件を選ばなければならない。街灯の灯りは影響が大きい。街灯の灯りが無い真っ暗な山奥で見る星空は素晴らしい。月明りも邪魔になる。満月の日は星座観察向きではない。人の目が暗さに慣れるのには時間がかかり、30分、1時間経ってようやく本領が発揮できるようになる。自然観察は焦って短時間でできるものではない。今の世の中の子どもたちにとっては「ゆったり、のんびり…」が許されないのが苦しいところだ。